院長コラム

一緒に考えましょう
健康のこと
医療のこと
66

新型コロナウイルス感染症と共に生きる社会

市民病院
院長　神谷里明

感染が収まる気配が一時ありましたが再度広まりを見せています。今後も収まったり広がったりを繰り返すと考えられます。

病院や施設では面会を禁止し、残された時間の少ない人への面会も大きく制限をかけています。人生の最後の場面をこのような形で迎えなければならないのはいつまで続くのでしょうか。

画期的な治療薬やワクチン開発には時間と費用がかかります。安全性の確認にも時間がかかり、場合によっては年単位かかります。当然一定の割合で発生する副作用対策も共に作り上げなければなりません。

このウイルスを完全に押さえ込むのは困難と思われます。今目指すのは発生を完全に押さえ込むことではなく、重症化し、亡くなる人を少なくし、後遺障害を残さずに治すことです。

人と人との関わり方に変化が起きています。日常生活の中でどのように人と接するのか。人との関わりを求めるのか、安全を求めるのか。

人と接することの意義は何でしょう。画面を見て話をすることと直接会って話をすることの違いは何でしょう。

また、肌を触れあうことの意義と危険性についても考えなければなりません。今まで普通に行ってきた握手、ハグ、ハイタッチなど直接肌が接する事への恐怖感を感じますか。

距離感を保って人と接する新しい生活習慣、生活様式ができあがっていくのでしょうか。

しかしながら、医療、介護の現場では人と人が接触せずにサービスを提供するのは非常に困難です。その中でお互いの安全を保ちながら業務を行っています。

人生の楽しみとは何でしょう。食の楽しみとは。今は一人で黙って食べることが増え、大勢で一緒に食べることが禁じられているように感じます。お酒の飲み方、楽しみ方も変わってきています。知らない土地への旅行、知らない人との交わり、今まで食べたことのない食べ物。そういうものへ接する機会もほとんどなくなりました。

一年間全て中止になった、お祭り等の行事。本当に寂しい一年間でした。

今後どのような形で人と接するのが良いのか、みんなで作り上げていかなければなりません。